カドを制する
～文化芸術が広がる江古田のまちづくり～

都市空間生成研究室
1641012　　石田　有希

文化芸術　　まちづくり　　江古田
角地　　文化芸術振興　　都市空間

1.　研究の目的と背景

本研究は、東京都練馬区にある西武池袋線の江古田駅周辺を対象に、文化芸術活動を振興する仕組みと空間づくりを検討し、都市生活者の文化芸術活動への参加による魅力的なまちづくりを計画することを目的とする。

文化芸術は、人々に喜びや感動、生きる活力を与え、心豊かに生活していく上で必要不可欠なものである。近年では、文化芸術基本法の制定にあるように、文化芸術そのものの振興だけでなく、観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等とも連携した政策が重要視されるようになった。文化庁では、地方公共団体が取り組む文化芸術活動を支援し、全国的な文化芸術の振興、地域活性化を目指す、文化芸術創造拠点形成事業が行われており、地域の資源を活かした文化芸術によるまちづくりが推進されている。

2.　東京都における文化芸術都市の特徴と分類

2-1.　歴史的背景から見る都市の分類

上野は、内国勧業博覧会の開催により、国の重要な文化財が保管、展示される場所となったことから、日本の文化を保全、継承する地として存在している。そのため、もともとは文部省により配置されたものが多く、現在は独立行政法人の管理下にあるものが特に集中している。

歓楽街となった日比谷・有楽町は、エンターテインメントの地として、劇場や映画館などの文化施設が増えたという背景がある。そのため、直営の会社の意向によって施設の開館や閉館が柔軟に行われてきた。時代の移り変わりによって、土地利用の変化が最も大きいことが分かる。

下北沢は、本多一夫氏の熱意と、若者の夢によってここまで劇場やライブハウスを増やしてきた。小劇場の需要と価値が立証された地であると考える。

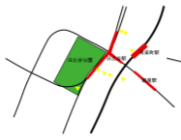
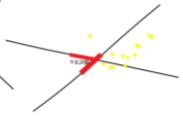
2-2.　都市での消費活動の分析

3 都市それぞれの街歩きルートから、図 1 のように分析する。上野に訪れる目的が美術館や博物館の展示会であることが多く、そのついでに上野公園内を回遊しているケースが多く見られた。日比谷はオフィス街であるため、通勤者以外の来街者は、日比谷だけで過ごすことはほとんどなく、銀座や東京駅付近まで行動エリアを広げていた。下北沢については、行動エリアは駅周辺のみであり、文化施設を利用する人は見られなかった。

2-3.　考察

これらの分析から、以上の 3 都市は、都市空間の中での文化芸術活動が不足していると考察する。文化施設は都市空間の中で重要な資産として存在し、利用されているが、街を歩いていて日常的に文化芸術に触れる機会がない。本当の「文化芸術の街」とは、街にいるだけで文化芸術を感じられる空間なのではないか。つまり、上野、日比谷・有楽町、下北沢は、「文化施設と都市」という関係性であるが、より人の行動に目を向けた、「文化芸術活動とまち」という関係性が、魅力的な文化芸術の街を創り出せるのではないかと考える。

表 1．3 都市の特徴と分類

	上野 「公園集結型」	日比谷・有楽町 「復興計画型」	下北沢 「プロデュース型」
文化施設の配置			
来街の目的	上野動物園 展示会	観劇 たまたま通ったから	下北沢謎解き 街歩き ショッピング
周辺地域との関わり	上野公園内を歩き回る 御徒町、谷根千エリア との行き来	ほとんどが銀座や東京 駅付近にも訪れる	駅周辺のみ 行動範囲が狭い
年齢層	幅広い 親子連れ 観光客	年配 ある程度お金に余裕が ある人	若者 親子連れ
チケット価格	500円～1600円	8000円～12500円	2500円～6000円
特徴や課題	文化施設はほとんど公園内にあるため、駅から街を歩かずに目的地へ行けてしまう	有名な劇場が集まるが敷居が高く、ビジネス街であるため、ふらっと立ち寄ることが少ない	様々なアクティビティを楽しめる街であるが、小劇場での演劇は新規で入りにくい

3.　江古田の地域特性

3-1.　江古田の概要

江古田には、武蔵大学、武蔵野音楽大学、日本大学芸術学部の 3 大学があり、学生が多く存在する街である。そのため、学生向けのリーズナブルな価格の飲食店が多く、昼間は学生で賑わう。大学の特色により、音楽や芸術を学ぶ学生が集まることから、江古田には貸しスタジオや楽器店、ミュージックバーが点在する。学生だけで

なく、クラシック音楽からジャズやロックの演奏家、そしてジャンルを超えてワールドワイドな音楽を表現する演奏家、それらを楽しむ住民や演奏愛好家など、様々な音楽人が生息するまち[1]である。

3-2. 現状分析と課題

学生や住民で賑わい、音楽やアートに関するイベントが毎年開催されるなど、地域の活動は活発であるといえるが、都市空間に着目すると、3 つの課題が発見できた。

①踏切により街が分断されている

踏切北側の江古田ゆうゆうロードと、踏切南側の江古田銀座通りは、一本の道でつながっているにも関わらず、踏切があることによって通行の流れが途切れ、街の連続性が失われている。

②音楽関連施設の未活用

飲食店が多く集まり、江古田で最も人通りが多く賑わいのある場所であるが街の資源であるミュージックバーやライブハウスを活かしきれていない。

③人が枝分かれする地点

駅からの歩行者は交差点で枝分かれし、日本大学へ行く人、直進し日大通りを行く人、左へ曲がり小竹通りを行く人の 3 方向に分散する。

4. 設計提案

4-1. コンセプト

課題として挙げられた 3 地点では、それぞれの場所での角地の活用が重要となると考える。つまり、江古田において、街全体の活動をつなげ賑わいをもたらすためには、角地での文化芸術活動が活発になることが必要であるといえる。角地をどのように使って文化芸術活動を行うのか、角地だからこそできる活動や人の出会い方、つながりを提案する。

①プログラム 1：カドでつながる（図 2）

踏切を挟んだ角地である 4 点において、新たな活動拠点となる場所をつくる。それぞれの活動が関わりあうことによって、2 つの商店街の間に人の流れが生まれ、踏切で分断されていた街がつながる。踏切を超えて反対側に行きたくなるような店舗の見せ方、行われる活動が必要となる。

②プログラム 2：カドで立ち止まる（図 3）

ライブハウスやミュージックバーを活用して新たな価値を生み出すために、それらを角地に移転させ、隅切り部分である店舗の前で活動を行う。店主や常連客、ミュージシャンによって繰り広げられる、路上ライブや演奏会、即興セッションを聞くと人々が足を止める。忙しく歩きまわる日常の中に、ふと音楽に導かれて立ち止まる瞬間を作り出す。この場所では、既存の店舗を活かした住民参加型のまちづくりをソフト面から提案する。

③プログラム 3：カドに集まる（図 4）

ただ通り過ぎるだけの道に人々のたまり場となる場所をつくることで、自然とそこに人が集まり賑わいが生まれ、思いがけない人と接することができる。たまり場の空間を、建物の中だけではなく外に広げていくことで、それぞれが接続していき、街全体に広がる。

図 1. プログラム 1 の全体平面図

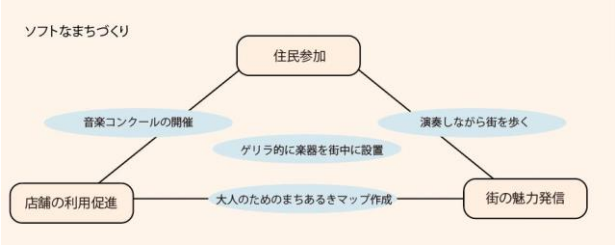


図 2. プログラム 2 のソフトなまちづくり案

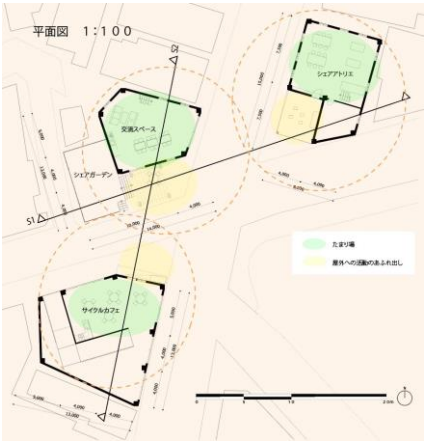


図 3. プログラム 3 の平面図

注

1）EKO ON!!江古田音楽祭のホームページから引用

参考文献

1）文化庁ホームページ
2）練馬区，「ねりま 60：練馬区独立 60 周年記念」，練馬区，p32-p43、2007 年
3）練馬区ホームページ